

J. タ ッ カ ー の 全 体 像

—シェルトンのタッカー研究に寄せて—

杉 山 忠 平

1

W. E. クラークがジョサイア・タッカーについての研究¹⁾を公表して以来、4分の3世紀余が経過した。R. C. スカイラーがタッカーの数点の著作を編集し、それに伝記的序文を付して刊行²⁾してからでも半世紀余がすぎた。

いらいタッカーは「忘れられた経済学者たち」(セリグマン)の1人ではなくなった。スカイラー自身1945年に *The Fall of the Old Colonial System* を書き、そのなかでタッカーにふれるところがあった。わが国でも、戦前および戦後における若干の前史³⁾ののち、小林昇が彼にかんする一連の論文を書き、それを主要部分とする、したがってタッカーについてのモノグラフ的研究書に近い『重商主義解体期の研究』(1955)を公表した。小林の論文は「ジョサイア・タッカーと産業革命」という副題が示唆するように、クラークやスカイラーの成果を援用しつつも、資本主義の胎動期を背景として、タッカーを経済思想と政治思想との両面において、立体的にとらえようとするものであった。

しかし、タッカーの生涯と業績とを、イングランド国教会の聖職者としての活動にもわたりつつ、総体的に追跡する仕事は、なお残されてきた。彼の全著作はもとより、彼自身および彼と直接・間接にかかわる同時代人の手紙、同時代の定期刊行物や著作等、利用しうるかぎりの一次資料を駆使した成果が George Shelton, *Dean*

Tucker and Eighteenth Century Economic and Political Thought, The MacMillan Press, 1981 である。ここにタッカーの生涯と思想についてかつてスカイラーによって与えられた「素描」(シェルトン)をはるかにこえる詳細な伝記的情報が提供されることとなった。

2

クラークいらい、経済学者としてのタッカーへの主たる関心は、その経済自由主義的主張のゆえに、アダム・スミスとの対比におかれるのが通例となってきた。そしてそれは当然でもあった。タッカーはスミスより約10年まえに生まれ⁴⁾、スミスより9年おそくまで生きた。こうして彼らは完全に同時代人であったばかりではない。スミスがタッカーの著書11点を所蔵していたことはつとに知られている⁵⁾。またデイヴィッド・ヒュームの書簡集⁶⁾によって、タッカーがヒュームと親密な関係にあったことも、すでに判明している。ヒュームとスミスとの関係はあらためていうまでもない。タッカーとヒュームとの交流はもともとロード・ケイムズ(ヘンリ・ヒューム)を介してだったが、タッカーが後者と25年以上にわたって文通があったことも、このほどシェルトンの手であきらかにされた(p. 166)。そのロード・ケイムズとスミスとの関係も知られるとおりである。

さらに、ヒュームをとおしてタッカーはテュルゴとの知的交流をもつようになったし、彼の著作2点はテュルゴによって伝訳——そのうち1点は出版——されているのであるが、そのテュルゴがスミスと知己であり、スミスを「尊敬」していたことはスミスの自認するところでもあった⁷⁾。あるいはまたヒュームといたしく、スミス

1) Walter Ernest Clark, *Josiah Tucker, Economist: A Study in the History of Economics*, New York, 1903.

2) Robert Livingston Schuyler, *Josiah Tucker: A Selection from his Economic and Political Writings*, New York, 1931.

3) 小林にさきだつ研究史については、小林昇「重商主義の解体」(福島大学『商学論集』Vol. 22, No. 6; Vol. 23, Nos. 1, 2, 4 <1954> 所収の「ジョサイア・タッカー小論」)の「まえがき」に付された注(3), (4)をみよ。『小林昇経済学史著作集』IV, 1977, 14 ページ。

4) 生年の推定については W. E. Clark, *op. cit.*, p. 22 n. シェルトンはこれを継承している。

5) James Bonar, *A Catalogue of the Library of Adam Smith*, London, 1894, 2nd ed., 1932, pp. 147, 187.

6) *The Letters of David Hume*, ed. J. Y. T. Greig, Oxford, 1932.

7) *The Correspondence of Adam Smith*, eds.

とも知己であり、『国富論』の仏訳——ただし未刊——をもしたアベ・モルレは、タッカーとはイギリス旅行にさいして彼の家に滞在するほどの関係にあった(p. 172)。

このような知的交友範囲の共有にもかかわらず、両者が互に他を知らなかったと考えることは、むしろ不自然であろう。ところが、これまで知られるかぎり、スミスはどこでもタッカーの名にふれておらず、タッカーもスミスの名にふれていない。この謎はシェルトンの追求によっても解明されなかった。しかし、他の諸点についてと同様、スミスの主張とタッカーのそれとの異同の点についても、シェルトンはきわめて詳細である。若干の例でみてみよう。

タッカーにおける自己関心の位置についてはすでにクラークが着目しているが⁸⁾、シェルトンはより具体的にアイルランド、商業的独占、植民地、課税など、自己関心ないし自愛心をそれが論じられる文脈においてあきらかにしようとする。スミスとことなり、タッカーは自愛心の予定調和を信じない。自愛心はそれ自体では「すべての公共善にとっての毒物」⁹⁾であるが、それは減殺されるにはあまりに人間にとって基本的である。そこで「自分の利益を追求することによって公共の利益を推進するように、それに方向を付与する」¹⁰⁾ことが目標とされなければならない。方向を付与するのは、いうまでもなく、国家である。こうしてタッカーにおいては国家の役割は最初から想定されている。

無制約的な自愛心は反社会的な利益に導くが、国家によって統御された自愛心は社会の発展に不可欠である。このようなしかたでの自愛心の是認の起源をシェルトンはブリストル時代の若きタッカーが当時の上司、ブリストル主教ジョウゼフ・バトラーから受けた影響に帰する。「冷めた自愛心」は長期的には良心と同一の方向に人間を導くのであり、それによって人は悪徳を克服して徳に至るというバトラーの主張に、宗教と経済との両立に疑念をもたない後年のタッカーの淵源があるとシェルトンはみている(pp. 14-15)。ここにも伝記的方法によるシェルトンの独自の寄与があるということが出来る。

Ernest Campbell Mossner and Ian Simpson Ross, Oxford, 1977, p. 286.

8) Clark, *op. cit.*, pp. 84, 87.

9) Josiah Tucker, *A Brief Essay on the Advantages and Disadvantages which respectively attend France and Great Britain with regard to Trade*, London, 1749, 2nd ed., 1750, p. 61.

10) Tucker, *The Elements of Commerce and Theory of Taxes*, 1955, p. 59, cit. Shelton, pp. 91-2.

国家の介入への道が最初から開かれていたからといって、彼はタッカーを重商主義とはかかわらせない¹¹⁾。スミス以前の著作家たちはきわめて多様であって、「彼らをむりに〔重商主義という〕1つの型におしこめることは彼らを正当に遇するゆえんではない」と彼はいう(p. 50)。国家の役割についていえば、海運法を容認し、国防にプライオリティをおいたスミスと、幼稚産業の保護に国民的利益をみたタッカーとのあいだにあるのは、いわば程度の差——大きな差であるにせよ——にすぎないと彼はみているように思われる。そこには一方にスミスの、他方にジェイムズ・ステュアートの経済学体系をおき、その対照のなかでタッカーを位置づけようとする小林昇の視点との本来的な相違があるようにみえる。

だから、たとえば賃金論にしても、シェルトンはタッカーの低賃金論に重商主義的伝統をみようとはしない。逆に、スミスの経済学が高賃金論のそれであることは認めつつも、グラスゴウ大学での彼の『講義』においても、『国富論』においてさえも、労働の低価が商品の低価を、それゆえ商品需要を、それゆえまた商品を生産する労働にたいする需要を増すという論点があると指摘する(p. 57)。つまりシェルトンはタッカーとスミスとの距離をちぢめようとしているようにみえるのである。

その他、すでにふれた特権的独占にたいする攻撃をはじめ、富観(pp. 47, 76)、徒弟制度の害についての認識(p. 94)、長子相続や限嗣相続にたいする批判(p. 96)、生産的・不生産的労働観(pp. 66, 101)、独立生産者観(pp. 111-2)、土地所有者観(p. 198)等の諸点において、いかにタッカーがスミスと見解を共通にしていたかをシェルトンは指摘する。そして社会的利害の不調和あるいは階級対立の問題(p. 113)や機械の生産性の問題(p. 110)等の点でタッカーはスミスよりも深い認識に達していたとシェルトンはいう¹²⁾。

これらの指摘はタッカーにたいして「後世がおそらく極度に不寛容であった」(p. 258)ことから彼を救出しようとする意図によるものと思われる。シェルトンのみどころ、「不寛容」な「後世」の代表は、スミスにききだつて経済思想史上の革新者をタッカーにみようとしたクラ

11) シェルトンは同じ点について別の関連では「重商主義思想に典型的」ともいい(p. 65)、一貫していない。

12) この点でのタッカーのスミスにたいする先進性についての小林昇の強調、それにたいする内田義彦の批判(「タッカーとスミス」、内田義彦編『古典経済学研究』上巻, 1957, 273-305ページ)等は知られるとおりである。

ーク＝スカイラーを攻撃したジェイコブ・ヴァイナーである。「通説」によれば「開明の新時代はレセ・フェールの教説が……啓示された1776年に始まった」のであり、タッカーの役割は、もし認めるとしても、「重商主義のくびきをほとんど免れたが、決定的な瞬間に古き悪しき方式にたち戻ってしまった」ことにある。そうした解釈のなかで、ヴァイナーはタッカーを「レセ・フェールの羊のふりをしようとした重商主義の狼」とみなした点で、ユニークだったにすぎない(pp. 258-61)。

タッカーがいかにか個々の論点でスミスを先取りし、新時代への用意をしたかを発見することの意義は、もちろん、いくら強調されてもされすぎることではない。しかし「後世」の「不寛容」にはそれなりの理由もまたないわけではなかった。そしてそれはなぜスミスは資本主義的経済分析への道を開いたのに、タッカーは開かなかったか、あるいは開いたとはみなされえなかったかという問のたてかたをすることによってのみ、解明されるはずのものである。シェルトンが駆使した伝記的手法のもたらした成果は賞賛されなければならないが、それはまたこのような設問によって補われなければならないのではないか。

3

伝記的方法の制約につらなるかもしれないものは他にもある。たとえばタッカーにおける経済的自由主義と政治的保守主義との関係もそれであり、宗教と経済や政治との関係もそれである。前者の点についていうなら、タッカーにおける経済的自由は「特許状や排他的権利」すなわち商業的独占にたいする批判であると同時に、地主的大土地所有にたいする批判でもあったが、それは両者が反国民的であり、公正の原理に反するという理由と、むしろそれ以上に、それらが全般的利益に反するという実際の理由からでもあった。

アメリカ植民地問題にたいする彼の態度にもそれと共通するものがあつた。『国富論』におけるスミスはアメリカについてもアイルランドについても本国との合邦を支持し、そのかぎりでは首尾一貫していたが、タッカーはアイルランドについては合邦を擁護し、アメリカについては完全分離を主張した。この一見矛盾した態度に共通するものは、多少の政治論的外皮を別とすれば、一方の合邦も、他方の分離も、ともにその方がそうでない場合よりも、多くの経済的利益をもたらすという見解である。それはハドスン・ベイ・コンパニーのような特権的貿易会社にたいする彼の反対とも、パーミンガム、マンチェスター、リーズ、ハリファックス等の内陸産業都市の繁栄についての彼の認識とも結びついていた。

他方、政治思想の面では、タッカーはリチャード・ブライスやジョゼフ・ブリストリはもとより、彼らの思想的淵源と彼のみるロックの批判に情熱を傾ける。彼は「すべての独占のうちでも奴隷制は商業国民の利益にとってもっとも有害である」¹³⁾ といいつつも、同時に社会を本来平等な個人の合成体とみる「ロック氏の民主的な原理」¹⁴⁾ には徹底して反感を表現してやまない。このような一方における自由主義と他方における保守主義とを結合させている内的論理は何であろうか。シェルトンはそのような設問をたてることにはあまり関心をもたないように思われる。

聖職者としてのタッカーと経済学者としての彼とを結合させている内的論理は何であろうかという疑問についても、同様のことがいえる。グロスター主教ウィリアム・ウォーバトンはタッカーを評して彼にとっては「商売が宗教である」といったというが¹⁵⁾、そしてタッカーはそれに不満を表現したというが(p. 165)、不満を不満たらしめる必然性はどこにあったのであろうか。

タッカーはアリウス主義やソシニウス主義にふれて、それらが「人間の乏しい理性で[神の]底知れぬ深さ」をさぐろうとするものだといったということシェルトンはあきらかにしており(p. 180)、ブライスやブリストリにたいする彼の敵意の底にはそれがあつたことを思わせるが、上にもみたように、敵意は直接には彼らの政治思想に触発されたものであつた。アメリカ植民地の独立については、いわば共通の政策的陣営に属したはずでありながら、彼らの思想を共和主義につらなるものとして、タッカーは許容することができなかったのである。

タッカーはまたはやくから外国人プロテスタントやさらにはユダヤ人の帰化にも積極的な支持を示したが、そこでも信仰の問題あるいは宗教的寛容の問題よりは、経済的な利益という現実的な問題に主眼がおかれていた。その点で彼は「商人経済学者」(レトウィン)ジョウサイア・チャイルドと同じ平面にいたといえる¹⁶⁾。一方では宗教書を書くとともに他方では経済書を書き、さらには

13) Tucker, *Reflections on the Present Matters in Dispute between Great Britain and Ireland*, London, 1785, p. 14.

14) Tucker, *Four Letters on Important National Subjects*, London, 1783, p. 87.

15) Clark, *op. cit.*, p. 68; Schuyler, *op. cit.*, p. 17; Shelton, p. 165.

16) タッカーはチャイルドを「商業上の第一級の著作家」と呼んでいる。Instructions for Travellers, London, 1757, p. 9.

主著の1つ(*Instructions for Travellers*)で「国教会および寛容」と「商業および租税」とをそれぞれ独立の項目として並列させた彼にとって、信仰と経済とはどのような内的関連をなしたのかは、やはり問われねばならない問であろう。クラークは「彼[タッカー]にとって道徳を説教することは、同時に、商業的世界におけるもっとも賢明な行為のための指導原理を教えることでもあった」と要約的にいっている¹⁷⁾。この点にかんするかぎり、シュルトンはクラークを大きくは越えていないように思われる。彼は事実上「タッカーは彼の宗教がトレイドよりもはるかに多くのものからなっていること、神学論争の領域においても自分の立場を保持しうることを示すことができた」というにとどまるからである(p. 181)。

4

シュルトンはかならずしも伝記的研究だけに自己を限定しているわけではない。伝記的方法を基本としながらも、しばしば歴史的展望のなかでタッカーをみることも怠ってはいない。そのさい、シュルトン自身の現代的な意識を逆にタッカー解釈に投影させているのではないかと思われる場合もある。タッカーにおける戦争観や婦人観の強調はその例である。

戦争一般についてタッカーは「非人間的きわまる怪物についての記憶がいかに賛美や喝采をこめて仰々しい詩や散文で後代にまで伝達されるかを考えると、まことに驚くべきことである」¹⁸⁾といい、多人口を祝福とする伝統的な立場から、人員の殺傷をもたらす戦争自体の無意味を説き、ジョージ・パークリを援用しつつ、領土拡張戦争を否定している(pp. 122-3)。アメリカ植民地問題にたいする彼の態度も同じである。予想される勝利もなんら現実的利益をもたらさないとし、実際の戦争にはるかにさきだつ時期にすでに彼は反戦的態度を明確にしていた(p. 168)。あるいはまたロック批判の過程でも新しい戦争への民衆の不断の待望をあげ、それを経済的利害にたいする彼らの無知に帰している¹⁹⁾。シュルトンはタッカーのこのような「平和主義」を強調し、「平和主義はタッカーひとりのものではなかったとはいえ、アダム・スミスのような開明的な人でさえ戦争を『すべての

技芸のなかでもっとも高貴なもの』とみなしたという事実」にてらすとき、それは当時あってはきわだっていたというのである(p. 126)。

婦人についても彼はタッカーの独自性を強調する。「彼[タッカー]は同時代人の大半よりもはるかに婦人を高く評価していた。独占にたいする彼の忌避は女にたいする男の特権にも及んでおり、この点で彼は時代をはるかにさきかけていた」と彼はいう(p. 66)。婦人を問題として意識さえしなかったスミスとくらべてだけでなく、婦人における参政権の欠如に疑問をもたなかったジョン・カートライトのような急進主義者とくらべてさえ、タッカーの先進性はあきらかだとシュルトンはいう(pp. 66, 237)。婦人と結婚して、婦人の助力者である場合以外には、本来婦人のものである仕事を男が行うべきでないという *The Elements of Commerce and Theory of Taxes* の主張もまた指摘されている(p. 94)。

これらの指摘は貴重であり、銘記に値する。しかし過去に近代を投影させることの危険はつねに胚胎する。ハドスン・ベイ・コンパニーへのタッカーの *The Elements* における批判のうち、コンパニーの所領を本国は買収すべきだという提唱と、そこにスコットランドのハイランド人を入植させるべきだという提案とが、それぞれ1870年のNorth West Territories, 1812年のロード・セルカークの植民計画を先取したもので、「いちじるしく予言的」だとするのはその一例である(p. 104)。あるいはタッカーの自己愛と政府介入とにふれて、「彼の立場は[マルクスよりも]ブルードンによってのちに擁護され、アメリカ人によって広く受け入れられた立場、すなわち、個人をして労働者階級の恒久的なメンバーたるに甘んじさせておくよりは、彼らを鼓舞して中流階級に上昇させる立場に近かった」(p. 114)とするのも、同様の例である。さらには、タッカーの幼稚産業保護論にふれて、それがヴァイナーによって擁護された「古典的国際貿易経済学」よりは、第2次世界大戦いらいの「相対的自由貿易」が先進国と発展途上国とのあいだのギャップを増大させたというグンナー・ミュルダールの主張に近似する(p. 264)とするのも、同様の、あるいは一層不幸な例である。過去を近代にひきよせるこのような解釈ほど非歴史的なものはないからである。タッカーの全体像に迫ろうとする意欲的なシュルトンの伝記的研究の達成が大きいだけに、惜しまれてよいであろう。

(一橋大学社会科学古典資料センター)

17) Clark, *op. cit.*, p. 91.

18) Tucker, *Four Tracts together with Two Sermons*, Gloucester, 1774, 2nd ed., 1774, p. 60.

19) タッカーはそのほか都市におけるトレイドの自由、外国人の定住、機械の採用への「無思慮な大衆」の反対をあげ、「民の声」を「神の声」とすることの誤りをいう。A *Treatise concerning Civil Government*, London, 1781, pp. 212-3.